

「伝統」という名の「暴力」  
 —セクシュアリティにおける脱構築とは—  
 ～女性性器切除をめぐる～

石田 依子\*

Violence Named Tradition : Deconstructing Sexuality over Female Genital  
 Mutilation

Yoriko ISHIDA

Abstract

Female Genital Mutilation, called FGM, is a custom, which has been practiced among some ethnic groups in Africa and Arab. FGM varies in type from Sunnna, which means removal of the tip of the clitoris, to Pharaonic, which means scraping away of the entire genital part. It is said that in the latter case the remaining sides are stitched together. Needless to say, FGM is cruel custom, I suppose. The issue of FGM has generated heated public debate in Europe and the United States. In particular, Alice Walker, who is a black woman novelist, has strongly condemned the practice of FGM in a field of literature. She confronts FGM in her novel *Possessing the Secret of Joy*. I think her assertion should be praised, but the issue includes more complicated element, that is, FGM is practiced in the Third World, and First and Third Worlds exist as radically separate worlds. Some people criticize her attitude, because it is colonialistic.

In short, the current controversy surrounding FGM is inextricably linked to other debates that concern the nature of human rights. In this paper, I attempt to address the issue of FGM by offering global thinking.

Key words: Female Genital Mutilation, sexuality, womanism, feminist thought, Alice Walker, human rights.

1. はじめに

「男女共同参画」や「男女平等」という看板をバックに、「セクシャル・ハラスメント」なる言葉が世間を闊歩し始めて久しいが、そもそも「ジェンダー概念」というものが一般的にはどのように理解されているのか疑問に思うことがある。「人間の平等」の中で、「男女平等」の概念は「人種平等」と並んで重

要な部分を構成し、長い歴史の中でも多くの先人たちによって追求されてきた。20世紀後半に展開した「女性学」、「男性学」、「セクシュアリティ研究」などの学問分野は、いずれもこのテーマを具現化したものであろう。そして、このような学問の中で中心的な役割を果たしてきた概念が「ジェンダー」なのである。今日では、人種や民族といった従来のカテゴリーと並んで、「ジェンダー概念」の視点なしでは人間存在の多様性に配慮した分析や認識はありえないといっても過言ではない。

このように、学問としての「ジェンダー論」は大々的に研究がなされ、その意味では、前時代の女性たちに比べれば、現代に生きる我々にとってははるかに行動しやすい環境が整えられていると言えるかもしれない。ところが、そのような学際的なレベルを離れて、ひとたび現実の社会に目を向けるとどうだろうか。そこでは、「人権」としての「女性の権利」なるものが本当の意味で理解されているのか、はなはだ疑問に思わざるをえない。「ジェンダー」の何たるかもわかりもしないで、昨今では、誰もかれもが「セクハラ、セクハラ」とまくし立て、「権利」を通り越して女性が必要以上に「優遇」すらされているような錯覚を起こすこともある。だが、それは、企業や団体が「セクハラ反対」という世間の流行に振りまわされているだけにすぎないのではないかと。言い換えれば、そこで重要視されているのは「対外的な見てくれ」だけであって、本当の意味での「女性の権利」というものが十分に考慮されているとは言いがたい。「女性に宴会で酒を注がせるな」、「カラオケでデュエットを強要するな」、「身体的なことには触れるな」など、「セクハラ防止」といっても、「あれをするな、これをするな」、もしくは「ああしろ、こうしろ」といった具合に、人々の行動を規制で縛りつけているだけで、根本的に「男女平等」や「ジェンダー」についての知識を会得させているケースはほとんどないのではないかと。逆の言い方をすれば、「女性にカラオケのデュエットを求めなく」なったら、男女平等が実現して言えるといえるのか。「女性にお茶を入れることを要求しなく」なったら、女性の人権が確保されたといえるのか。問題はそのような次元の低い話ではなからうに。「デュエット」を誘われても、嫌なら断ればよい、お茶を入れることぐらいで「セクハラ」だとまくし立てる女性がいたら、その女性のほうがおかしいとも言える。女性だったら、お茶ぐらい入れやってもよいではないか。逆に言えば、「女はお茶を入れるもの」、そう決めつけている男性がいるとしたら、その男性は女性に対して誤ったステレオタイプをもった人間だろうから、そんな程度の人間と議論するだけ時間の無駄というものである。

「セクハラ防止」の名のもとに、上辺だけの行動をあれこれと規制することは、かえって殺伐とした環境を作り出し、逆に「男性の権利」を侵害していることにもなりかねない。「女性のセクシュアリティ」を真の意味で解放するということは、決して行動の制約を設ければ実現するという問題ではないのだから。見てくれだけの「男女平等」とか、流行語としての「セクハラ」に振り回されるから、たとえば匿名でどこかの機関にたれ込むとか、アンケートに誹謗中傷の類のことを書き込むなどの反応が現れて、自分のレベルの低さを露呈するだけで、何の進歩も解決も見ないという結果しか得られないのである。本当の意味での「性の解放」とは、法や政治も含めた「文化」や「伝統」の中で、どのように女性が扱われているのかを見直し、それを踏まえた上で新たな「文化」を創造する「文化革命」でなくてはならないはずである。

## 2. 「人権」と「女性性器切除」

国連の世界人権宣言において「<sup>なんびと</sup>何人にも基本的人権があり、それは絶対に守られねばならない」という文句が謳われて以来、もはや50年以上の年月が経過している。にもかかわらず、マイノリティ民族や女性の人権が侵される行為が平然と行われているのが現状である。その最たる実例が、「女性性器切除」(Female Genital Mutilation: 以下、FGMと記す)の儀式であろう。1970年代以降、アフリカ内部でも女子割礼の廃絶を求める運動が起こり、国際社会からの批判が高まってきたことも事実であるが、しかし、目立った成果はいまだに見受けられず、FGMの因習は「伝統」の名のもとに相変わらず実施されているのが実情である。いや、それどころか、国際社会によるFGMへの批判は、「異文化に対する侵害」と受け取られ、むしろ以前よりも割礼存続の体勢がより強固になっているという一面すら見受けられるのである。

FGMの問題は、たとえば「ジェンダー論」やアフリカや中東の文学や歴史を専門分野とする研究者、あるいはWHO(世界保健機構)やWIN(女性国際ネットワーク)などの団体に関わる立場の人間か、そうでなければ「女性の人権問題」などに興味があつて、しかもよほどの知識を備えているマニアック

な人間でなければ、日本では一般的にはほとんど知られていないし、「女性の性器を切除する」などという言葉を用意に口にしようものなら、「何と卑猥な話をする人間か」と眉をひそめられたりすることも十分に考えられる。現に、今のこの時点で、本校の紀要に掲載された私の拙論を読まれている方でも、多大なる違和感を覚える方もいるかもしれない。確かに、我々日本人にとっては一見したところは何の関わりもない話であるように見えるし、そんな遠い世界のことを議論するなどまったくのナンセンスだと考える人間もいるかもしれない。だがそう言いながら、「関わりのない遠い世界の人権問題」には見向きもせず、その傍らで、自分が所属している企業や団体の「セクハラ反対運動」とやらにかなり積極的に携わっているとしたらどうだろう。私の考えでは、その人間はいわゆる「精神分裂的」な状態に陥っているとしか思えない。「人権」について真摯に向き合う以上、「自分の足元」と「地球の裏側」の区別などありはしないのだ。自分が所属している団体の「セクハラ問題」とやらに本当に真摯に向き合っている人間なら、「遠く離れた見知らぬ国」で女性としての人権を踏みにじられ、苦難の生活を強いられている女性たちのことを知ろうともせず一切無視することなどできないはずだと考えるのは極論であろうか。日本においてもほんの数世代前の女性たちは、「女性」ではなく「婦人」と呼ばれ、男性優位の封建社会で忍耐強く生きることを強要されていたのである。たとえ上辺だけにせよ、「セクハラ」という言葉がまるで流行のように使われ始め、かえって男性たちの肩身が狭くなったような現象が見られ始めたのは、ごく最近のことにすぎない。

とはいえ、FGMの問題は「女性の人権」だけが絡んだものではなく、事態はよりいっそう複雑である。というのも、そこには「欧米世界」と「第三世界」の間の軋轢が常に付きまとうからである。フェミニズムに対する関心が徐々に浸透してきた昨今であるが、最初にフェミニズム思想が起こったのが欧米世界であったということもあって、今までもそれは欧米世界を中心に発展してきたといわれても仕方はないだろう。アメリカにおいて最初にフェミニズム宣言の産声が上がったのは、マーガレット・フラウ (Margaret Fuller) の主著『19世紀の女性』(*Woman in the Nineteenth Century*)によってであり、それはセネカ・フォールズ (Seneca Falls) における女性会議を始めとする多くの女性解放運動に思想的根拠を与えた<sup>1)</sup>。19世紀後半に起こったこの運動は、一般には「女性参政権獲得運動」と理解され、アメリカにおけるフェミニズム運動の第一波とするなら、第二派は1963年に『新しい女性の創造』(*The Feminine Mystique*)を著したベティー・フリーダン (Betty Friedan) によって提唱されたのである。前者に対して、こちらは「女性解放運動」と理解されている。日本と違ってアメリカはレディ・ファーストの国であり、個人の主張が重んじられる風潮が強いと思っている人がいるが、この二つのフェミニズム運動がアメリカで発生したことからそれが大きな誤解であるということがわかるだろう。「女性らしさ」という神話を押しつけられて、女たちが従順で無批判な存在を演じてこなければならなかったのは、東洋も西洋も同じことである。「家庭の天使」や「女らしさの神話」への抵抗が欧米世界で生まれたことがすべてを物語っている。また、特に1960年代に発生した第二派フェミニズム運動の中で、白人女性と黒人女性の共闘が必ずしも上手くいかなかったことも周知のごとくである。運動が大衆化して次第に広がっていく過程で白人は黒人女性を徐々に排除していったからである。黒人男性からは性差別を、白人女性からは人種差別を受けなければならなかった黒人女性たちの落ち着く場所はどこにもなかったのである。「ブラック・フェミニズム」、つまり「ウーマニズム」(womanism)なる思想が生まれたのは、まさにこのような状況からであった。アリス・ウォーカー (Alice Walker) によって提唱されたウーマニズム思想は、白人女性たちの掲げるフェミニズムとは一線を画し、黒人女性たちを啓蒙していくことであったのだ。フェミニスト運動は1970年代に入るとより燃え上がりを見せていき、それまでは中産階級の女性中心だった運動も、労働者階級、特に若者層を中心にして広がっていった。一方、ウーマニズムも1970年代後半にはより安定を見せ始め、黒人女性のためのフェミニズム思想という観点から、すべての女性のための解放を目指す運動へと成長していくのである。アリス・ウォーカーは1992年に、『喜びの秘密』(*Possessing the Secret of Joy*)においてアフリカで行われているFGMの因習に挑んでいるが、これは地球上のすべての女性の幸福を提唱するウーマニストである彼女なればこそ成しえた仕事であったのかもしれない。ウォーカーの『喜びの秘密』と第三世界との軋轢に関しては後に触れるとして、今はひとまず女子割礼に話を戻すことにしよう。

ここで「フェミニズム」について記したのは、まさにウォーカーの主張する「すべての女性の幸福」という観点から見ると、FGMは別世界で行われている特殊な行為ではなく、女性全体の人権につながる事柄であり、我々が沈黙してはならない問題であるということを経験したからである。アリス・ウォーカーは、「女性の権利」に真っ向から取り組むからには、社会での女性の地位という抽象的な観念

にとどまるだけではなく、母子家庭の貧困問題、どこの地域でも頻発しているであろうレイプの問題、家庭内暴力、そして「女性性器切除」の問題にいたるまで、すべてを概観してこそ、議論する立場に至るのだと言う。日本では、せいぜい「セクシャル・ハラスメント」という言葉が流行のように飛び交っているに過ぎないが、我々は、このウォーカーの言葉を肝に銘じる必要があるのではないのか。FGMの因習の実態を理解したところで、本音を言えば、「日本に生まれてよかった」、最初にこう思うのが現状かもしれないが、それでもまったくの無知であるよりは、地球上のどこかでこんな残酷なことが今でも行われているのだということぐらいは知るほうがましであろう。無知ほど恐ろしいものはない。「知らない」状態からは、何の思考も生まれず、進歩への道も開かれぬからである。本当の意味で「ハラスメント」を解消するという事は、自分の足元の塵を払うだけではなく、世界中の女性に対しての責任を放棄しないことではないだろうか。

### 3. 女性性器切除の実態

FGMは、主にアフリカ諸国や中近東で行われている風習で、簡単に言えば、女性の性器を切ったり縫い合わせたりして加工する行為である。WHOの調査によると、これらの地域に暮らしている女性は、今でも一億人に近い人数がこの手術を受けているという<sup>2)</sup>。

切除の方法は、概ね3つのタイプに分類される。

第一のタイプは、「スナ割礼」と呼ばれるもので、クリトリスを切除する方法である(clitoridectomy)。これは、クリトリスの包皮の一部または全体を切除する場合と、包皮に加えてクリトリスの先端もしくは全体を切除するという2種類がある。前者に関しては、ペニス先端の包皮を切除する男子割礼に相当すると考えられるが、この方法は女子割礼の中でも比較的軽いほうであり、行われている地域はほとんどないといっても良い。

第二、第三のタイプは、「ファラオ式割礼」と呼ばれるものである。第二に属するのは、「切除」(excision)行為が中心となり、女性性器切除の中では、中間のタイプに属する方法と考えられる。これは、クリトリスだけではなく、さらに小陰唇の一部もしくは全体をも切除する。実際に実行されている性器切除の8割がこの方法で行われているようである。

第三のタイプは、性器切除の中でも最も過酷なものであり、手術を受けた女性たちの死に至るパーセンテージが非常に高いとされている。これは、「陰部封鎖」(infibulation)と呼ばれるもので、大陰唇までえぐり取り、月経血と排尿の穴のみを残して全体を縫合するものである。この手術を受けた女性が結婚後に出産する場合は、産婆や切除師などが縫合部を刃物で切開し、出産後には再び縫い込むと報告されている。つまり、女性は出産のたびに切開と縫合を繰り返すことになるのである。このような第三のタイプは切除手術のうちでも15%を占めるという<sup>3)</sup>。

女性の健康な身体を、たいていの場合は麻酔もせずに、ナイフやカミソリなど不衛生な道具で切ったり縫ったりするのだから、どれだけ有害な影響が健康に及ぼされるかということは、くどくどと言わずとも想像していただけるだろう。縫合が伴う第三のタイプにいたっては、縫い合わせに使うのは植物のトゲなどで、穴がふさがらないようにするには麦わらなどを挿入しておくという。排尿や月経がスムーズに終わることはなく、そのたびに激痛が走ることは想像に難くない。そのために、排尿を我慢することで尿毒症を引き起こしたり、経血が小さすぎる穴を通りきれずに下腹部が破裂するほど血液がたまることもあるという。影響は肉体的なものばかりではない。手術時の痛みや恐怖などから精神的なトラウマを招くことも多々あるのである。切除行為を実行するのは、専門の手術師か産婆が行う場合がほとんどである。裕福な家庭では、医者が行うこともあるらしいが、これはごく稀である。とにかく、多くの場合が医学的知識や道具などとはかけ離れた不衛生な状況下で実行されると考えてよかろう。

このような過酷な風習がいつ、どこで始まったのか、その起源に関して歴史学などの分野で研究・調査が行われてきた。始まった時期については少なくとも2000年以上前だと推定されるが、正確な場所については未だ解答は得ていない<sup>4)</sup>。ところで、「男子割礼」は比較的知られていると思われるが、こちらは古代エジプトで実施されていたことがピラミッドに残された壁画から推察される。発生した場所はエジプトかエチオピアのいずれかであると考えられている<sup>5)</sup>。「男子割礼」が女子のそれと大きく異なるのは、前者はペニスの包皮を一部切除する程度にすぎないということだろう。「女子割礼」のように全体を切除したり、性器のどこかを縫い合わせたりということは行われぬ。したがって、割礼が原因で命に及ぶ影響が身体にもたらされることはほとんどないのである。

#### 4. 性器切除とセクシュアリティの抑圧

このような残酷な習慣がなぜ今でも続行されているのだろうか。それは必ずしも宗教的な理由によるものでもないという。むしろ、イスラム教徒の指導者の中には性器切除に反対している者すらいるという<sup>6)</sup>。にもかかわらず、なぜこの習慣が行われているか、それは、宗教による理由とか儀礼的な問題というように抽象的なことが原因ではなく、むしろもっと具体的な利益がゆえに行われているような気がする。シエラレオーネやウガンダ、ナイジェリアのようなアフリカ諸国では、成人への通過儀礼の一環として割礼の儀式が行われているが、この場合は「伝統」としての要素が強く、割礼を受けている女たち自身ですら、その意味や社会的機能を明確には理解していないという。つまり、彼女たちは「儀礼」や「習慣」として割礼を受け入れざるを得なくなっているというのが現状なのである。先に挙げた国々、さらにその他多くのアフリカ諸国で、FGM が存続している理由がどのように理解されているのかというと、たいていの場合、「避けられない伝統である」とか、「娘に割礼を受けさせないとお嫁にいけないから」、「割礼を受けないことは家族の恥である」という答えが返ってくる<sup>7)</sup>。ときには、「割礼は女性の健康によいから」というような、明らかに歪曲、偽りとも言える理由が本気で信じられていることもあるのだ。このように、もっともらしい理由をつけられ、女性は「伝統」としての「割礼」の儀式を押しつけられるのである。それはまさに、性的に抑圧され、受動的な女になることに他ならない。結婚するまでは処女を保つことを誓い、そうして初めて少女は結婚の準備ができた成人として認められていく。すなわち、FGM とは、「娘が無事に結婚できるように」といった儀礼因習的な仮面をかぶってはいるが、実は女性の「処女性維持と性欲抑制」の装置として機能しているのである。そのことは、この「因習」が存続している理由の一つとして、「クリトリスを排除しないと性欲がコントロールしきれず、売春婦になる」という理由が固く信じられていることが示していよう。つまり、女性の割礼は、「結婚の条件」であり、コミュニティにおける価値観を受け入れる誓いとして実行されてきたのだが、そのような意味づけは後から付け加えられた大義名分にすぎず、実は男のセクシュアリティの都合や男性中心の社会を温存させるための手段にすぎないのである。

結婚してもらうには処女でなければならず、結婚してからもつつましかで男に性を求めない女であること、日本でもかつて囁かれた価値観のようであるが、幸い、日本ではこのような「女らしさ」が「お茶」や「お華」というような無難な習い事として現れただけであって、性器を切除されるという形では現れなかっただけのことである。一見したところは、全くレベルの異なった話のように聞こえるが、根底にある価値観はFGM も「おしとやかな習い事」もなんら変わりはない。ただ、FGM のほうは、その価値観がより強烈に要求され、具体的な処置をもって実践されてしまったということだろうか。その原因の一つとして、「女は淫乱な生き物で、クリトリスを切っておかないと浮気のし放題で家庭は崩壊する」ということが本気で語られてきたことが挙げられようが、このような主張の中には、女性を劣るものと見なし、女性を支配しようとする体勢が明らかに存在していることは言うまでもない。

また、クリトリス除去を実践することで性欲や性感を抑制、抑圧するだけではなく、結婚まで清純な「処女」を守ることも FGM の大きな目的の一つであるということを経験すれば、女性の処女性は FGM の風習と表裏をなす大きな要因の一つとなっていることがわかるだろう。確かに、日本も含めて、どここの地域でも「女性の処女性」は重要視されているもので、日本でも一昔前までは処女でなくなった女を「傷物」と呼んでいたぐらいだから、FGM における「処女性」もそれほど突拍子もない理由付けではないように思われるかもしれない。ただ、それが「道徳的」、「倫理的」な観念にとどまらず、コミュニティの中で「まともな女性」として生きていくためにはそうならざるを得ないように、より強制された形で実行されているということである。FGM の中でも、もっとも過酷なものとも思われる第三のタイプのように、陰部が縫い込まれて封鎖されていなければ、要するに「使用済み」の女性と見なされ、誰からも相手にされない無価値な存在となってしまうのだ。

#### 5. 「女性性器切除」は文化か、拷問か？

FGM 廃絶の動きは、1970 年代までは低調であったが、70 年代後半になり、ようやくにして国際社会の FGM 廃絶に向けての運動が活発化してゆく。WHO は 1979 年に、FGM をテーマとして国際会議を開催しているし、1982 年、同機関は国連人権委員会に対しても切除廃絶に向けて正式な声明を発表して

いる。90年代になると、ウィーンで開催された世界人権会議においても、明らかにFGMが念頭に置かれた上で、国連人権規約の中に「性差別に基づく暴力」の項目が「加えられている。そして、アメリカ合衆国においては、1992年に出版されたアリス・ウォーカーの『喜びの秘密』が真正面からFGMの因習に向き合い、世論の注目を集めたのである。

かつて、アリス・ウォーカーは、「FGMは‘culture’（文化）などではなく、‘torture’（拷問）である」と述べた<sup>8)</sup>。彼女は、『喜びの秘密』において、FGMの習慣が肉体的にはもちろんのこと、精神的にも女性にどれほどの悪影響を及ぼすかという問題を描いている。ウォーカー自身、初めてFGMという風習の存在を知ってから、実際にこの問題に取り組むまでには25年の歳月を要したと語っている<sup>9)</sup>。

I wrote my novel as a duty to my conscience as an educated African-American woman. To write a book such as this, about a woman such as Tashi, about a subject such as genital mutilation, is in fact, as far as I am concerned, the reason for my education. <sup>10)</sup>

「私はこの小説を、教育を受けたアフリカ系アメリカ人としての私の良心への義務として書いたのです。実際、このような小説を書くために、そしてタシのような女性について、性器切除のような主題について書くために、私は教育を受けてきたのですから」

遠い国で行われているFGMという習慣に目をつぶるのではなく、それを知ってしまった人間の責任として、ウォーカーは地球上のすべての女性たちに対して愛情を込め、彼女の能力のすべてをかけてこの作品に取り組んだのである。作品では、FGMはアフリカの架空の国オリンカの「伝統」として登場する。主人公はタシというアフリカ人女性であるが、性器切除を受けた彼女の苦痛に満ちた人生が描かれていく。アリス・ウォーカーには、兄が撃った空気銃の弾が目当たったせいで幼い頃に失明したという不幸な過去がある。それ以降、片目での生活は地獄のような苦しみを彼女に与えたのだった。「視力」を切除されたと感じたウォーカーは、地球上で行われている「もう一つの切除」、すなわちFGMに注目するようになる。切除された対象は異なっても、その「切除」ゆえに同じように苦しみを背負う女たちのことを彼女は看過できなかったのである。

しかしながら、FGMの残酷さを憂い、悪しき「伝統」の犠牲となっている女性たちを救いたいというウォーカーの信念も、決して万人に歓迎されたわけではなかった。『カラー・パープル』(*The Color Purple*)でピューリッツァ賞を受賞したアリス・ウォーカーは、現在ではトニ・モリスンと並んで黒人女性作家の中でもアメリカ文学界の中に確固とした地位を築き上げた存在である。つまり、ウォーカーのFGM批判の姿勢を非難しようとする者たちは、彼女の作品自体がすでにある種の特権性を帯びていて、それゆえにウォーカーの姿勢は、第三世界を見下すような欧米世界の態度を凝縮したものに過ぎないというわけである。ウォーカーの作品に対してこのような主張を正面からぶつけてきたのが岡真理であったことは周知の事実である<sup>11)</sup>。岡は、女性の性器を切ったり縫ったりする習慣が「野蛮」であると決めつける「欧米世界」のフェミニズムの言説は、実は植民地主義的思想に基づいたものであり、異文化に対する干渉以外の何ものでもないと主張する<sup>12)</sup>。彼女の論点の背景には、植民地時代以来、アフリカやアラブの社会を貧困状態に置き、内部からの性器切除廃絶には不可欠だと思われる経済的自立や教育の普及を困難にしてきたのは、ほかでもない欧米列強なのだという見解が存在しているのだ。確かに、岡の主張も一理あるように見えるかもしれない。「アフリカやアラブでは、今でも男性優位の社会が温存され、女性は権利も認められず虐げられている」というように、岡の言い方を借りるなら「第三世界文化」とそこで暮らす女性たちを見下し、「日本に生まれてよかった」と自国の文化を優位に置く姿勢をとってしまうことにもなりかねないからだ。異文化の習慣をみだりに批判することは、「干渉」と受け取られても仕方がないかもしれない。だが、ウォーカーのFGM批判を「植民地主義の延長」だと言って非難する姿勢は、根本的な問題がどこかですりかわってしまっているようにも思われる。FGMの問題を取り上げるとき、それは「第三世界 VS 第一世界」の問題なのか。俗に「南北問題」と呼ばれる問題と重ねて考えてしまってよいことなのだろうか。否、FGMに関わる「女性の権利」の問題と「南北構造の関係」の問題は、別の土俵で語られるべきではないか。その意味で、「岡によるウォーカー批判は、第三世界と第一世界という分割線に基づいている」という千田有紀の分析は的を得ていると言えよう<sup>13)</sup>。

声高に FGM 廃絶を叫ぶ先進諸国は、抑圧されるだけの存在というネガティブなステレオタイプでしかアラブやアフリカのことを理解せず、ひいてはその社会全体をも野蛮なものと表象してしまうという批判は、FGM における「ステレオタイプ」そのものの意味を取り違えている。FGM に関わらず、太古の昔からこの社会でも多くが男性優位の構造で発展してきたということは周知の事実である。それは、女性が劣っているからそうなったのではなく、男性優位の社会の中で女性は「劣位」な役柄を押しつけられてきたからに過ぎない。そして、その「女性劣位」の考え方がステレオタイプとなって今でも機能しているからこそ、「セクシャル・ハラスメント」という言葉が表れ、本来は当たり前であるはずの「男女平等」の概念もわざわざ意識していなければなかなか実現しないような不備な社会となっているのである。無論、ここでいう女性の「ステレオタイプ」とは、地域による差異はなく、地球上のすべての女性に当てはまるものと考えられなければならない。あくまでも「すべての女性の幸福」を信念とするアリス・ウォーカーの心中には、少なくとも南北の対立の構図など存在しないはずである。彼女の中にただ存在するものは、「抑圧される女性 VS 抑圧する側の伝統」という構図ではないだろうか。

さて、本稿は、『喜びの秘密』に焦点を当てた文学論ではないので、テキストの詳細を分析することは避け、「FGM の習慣は「文化」ではなく「拷問」である」というウォーカー自身の主張に焦点を絞るとするが、このことに対しての私の答えは、今の時点ではイエスともノーとも言えないところである。ウーマニストとしてのウォーカーの FGM 批判の姿勢は尊いものであることは間違いない。だが、「文化ではない」と言い切ってしまうには、多少の無理があるような気がする。良きにつけ悪きにつけ、FGM は、ある地域で永年にわたって継続されてきた儀式であることに変わりはないからである。ただ、議論すべき問題は、「文化か文化でないか」ということではなく、たとえそれが「文化」と呼びうるものであっても、「文化」や「伝統」は得てしてその根拠が長い歴史のうちに歪曲、隠蔽されていることが多々あるのではないかということである。FGM はその最も顕著な例ではないか。FGM だけに限ったことではない。たとえば、中国の「纏足」も FGM と同じカテゴリーに属するだろう。昔から中国では、小さな足は理想的な女性の条件として考えられ、女性たちは子供の頃から小さな靴の中に足を封じ込めてその成長を止めることに専念したという。といっても、これは上辺にかぶせられた大義名分に他ならない。

「纏足」の実際上の目的は、女性が夫のもとから逃亡することができないように考え出された女性抑圧の装置なのである。成長の止まってしまった小さな足では逃亡も叶わず、あるいは逃亡したところで遠くまで行けるわけもなくすぐにつかまってしまう。本来の目的を考えれば、おぞましい風習であるが、「纏足」は以前からまぎれもなく中国の「文化」として受け入れられてきたのだ。FGM も理屈は同じことである。つまり、「FGM は文化か拷問か」という問いに対する答えは、「文化であると同時に拷問である」ということだ。だが、それが「文化」であろうとなかろうと、それはさほど重要な問題ではなかろう。問題は、「文化」や「伝統」の名を借りれば、たいいていのことが看過され、黙認されてしまうということである。その行為自体が、どれほど不条理であっても、昔から受け継がれてきた「伝統」であるといえ、まるで何もかも正当化されてしまうことの恐ろしさである。昨今では、FGM 廃絶運動がますます活発になってきているにもかかわらず、いまだにこの風習が根強く実行されているのは、まさにその背景に「伝統」という名の「大義名分」が存在するからである。

## 6. おわりに

「セクシュアリティ」とは、決して個人的なものというわけではない<sup>14)</sup>。それは私的なものであると同時に、社会全体の風潮をも映し出すものなのである。だからこそ、冒頭で述べたように、「セクシュアリティの解放」を実現するには、「文化革命」が行われなければならない必要性が生じてくるのである。アフリカやアラブから見て異文化に生きる我々が FGM 廃絶の声を上げたとしても、それは「異文化干渉」などではない。同じ女として、いいや、同じ人間としての連帯感を認識するとき、はじめて変容や改革に向かうエネルギーが生まれるのであって、このことは異文化だけではなく、自国の文化にも向けられることが可能だからである。日本においても、「セクシャル・ハラスメント」という言葉が独り歩きする状況だけでは、とても「文化」や「伝統」の革命は成しえない。そして、それを目指していくには、社会の差別構造をまず明らかにせねばなるまい。「ハラスメント防止」とは、あれこれと制約を設けることではなく、我々の一人ひとりが意識を改革していくことから始まるのである。「やっちはいけないこと」をだらだらと羅列することよりも、「やらなければならないこと」を一人ひとりが実践していくほうがはるかに建設的ではないか。個人レベルの小さな変化であっても、それがなければ全体の大きな変

化など起こるはずもない。一人ひとりの意識の改革が、いつかは大きなエネルギーとなって社会を変え、「文化」や「伝統」を改革していく力となるのである。FGM は我々とは無関係の遠い国の問題ではありえない。同じ地球上に生きる女であるかぎり、誰かの苦しみは自分の苦しみであり、無縁ではありえないのだから。他者に沈黙する者は、結局は我が身のことに沈黙するかもしれないし、「セクシュアリティ」の問題は自文化内だけでとどまるような単純な問題でもないからだ。よりグローバルな視点に立つてこそ、「伝統」への挑戦が可能となるのである。

※本稿は、平成17年10月7日に周防大島町教育委員会主催にて開催された「人権に関わる生涯学習」において講演した内容を加筆・修正したものである。

## 註

- 1) 別府恵子・渡辺和子編著 『アメリカ文学史』 ミネルバ書房、1989年。 p. 47
- 2) フラン・P・ホスケン『女子割礼』（鳥居千代香訳）明石書店、1993年。 p. 94.
- 3) 大池真知子「セクシュアリティのグローバルな構築へむけて—ジェンダー学関連の授業で語る女性性器切除」（『広島大学総合科学部『人間文化研究』 13号、2004年） p. 47-48.
- 4) 内海夏子 『ドキュメント 女子割礼』 集英社新書、2003年。 p. 50.
- 5) 同書、p. 51.
- 6) 大池、 p. 52.
- 7) 内海、 p. 73.
- 8) アリス・ウォーカー 「アリス・ウォーカー、インタビュー」（『コスモポリタン』1995年11月号）
- 9) Alice Walker and Pratibha Parmar, *Warrior Marks: Femal Genital Mutilation and the Sexual Blinding of Women* (London: Jonathan Cape, 1993) p. 265.
- 10) *ibid.*, p. 25.
- 11) 岡真理は、アラブ現代文学、第三世界ジェンダー論を専門とする研究者である。岡の見解については、以下の資料を参照のこと。  
岡真理 『彼女の正しい「名前」とは何か—第三世界フェミニズムの思想』 青土社、2000年。  
岡真理 「『同じ女』であるとは何を意味するのか—フェミニズムの脱情地区に向けて」（『性・暴力・ネーション』江原由美子編 勁草書房、1998年、pp. 207-56.）  
岡真理「フェミニズムとエスノグラフィーのあいだで—ジャニス・ボッディによる試み」（『女性学研究』8号、2000年、  
pp. 93-117）  
岡真理 「女子割礼という陥弄、あるいはフライデイのローアリス・ウォーカー『喜びの秘密』と物語の欲望」（『現代思想』24号、1996年5月、pp. 8-35.）
- 12) 「女子割礼という陥弄、あるいはフライデイのローアリス・ウォーカー『喜びの秘密』と物語の欲望」、pp. 14-15.
- 13) 千田友紀 「フェミニズムと植民地主義—岡真理による女性性器切除批判を手がかりとして」（『大航海』43号、2002年）p. 131.
- 14) 大池、p. 84

## 参考文献

- Barry, Kathleen. "Female Sexual Slavery: Understanding the International Dimensions of Women's Oppression" in *Human Rights Quarterly*, vol. 3, no. 2, 1980: pp. 44-52.

- Bass, Margaret Kent. "Alice's Secret" in *College Language Association Journal*, vol. 38, no. 1, 1994: pp. 1-10.
- Boulware-Miller, Kay. "Female Circumcision: Challenges to the Practice as a Human Rights Violation" in *Harvard Women's Law Journal* 8, 1985: pp. 155-77.
- 別府恵子・渡辺和子編著 『アメリカ文学史—植民地時代からポストモダンまで』 ミネルヴァ書房、1989年
- Daly, Mary. "African Genital Mutilation: The Unspeakable Atrocities" in *GYN/Ecology: The Metaethics of Radical Feminism*. Boston: Beacon, 1978: pp. 153-77.
- Dorkenoo, Efuwa. *Cutting the Rose: Female Genital Mutilation: The Practice and its Prevention*. London: Minority Rights, 1995.
- El Hadi, Amal Abd. "Female Genital Mutilation in Egypt" in *African Women's Health*. New Jersey: Africa World, 2000. pp. 145-66.
- 風呂本惇子 「女性解放思想史講座 アリス・ウォーカー—世界中の女性に責任を感じるウーマニスト」 女子教育もんだい編集委員会編 『季刊女子教育もんだい』 58号、1994年: pp. 80-87.
- Gruenbaum, Ellen. *The Female Circumcision Controversy: An Anthropological Perspective*. Philadelphia: University of Pennsylvania, 2001.
- ホスケン、フラン・P (鳥居千代香訳) 『女子割礼—因習に呪縛される女性の性と人権』 明石書店、1993年
- ルイス、ホープ (萩原弘子訳) 「「イルアと女性関切除の間: フェミニストの人権論と文化的な溝」 大阪女子大学『国際文化』 5号、2004年: pp. 58-90.
- Nako, Nontsasa. "Possessing the Voice of the Other: African Women and the Crisis of Representation in Alice Walker's Possessing the Secret of Joy" in *Oyewumi*: pp. 187-95.
- 岡真理 「女子割礼という陥弄、あるいはフライデイのローアリス・ウォーカー『喜びの秘密』と物語の欲望」 『現代思想』 24号、1996年: pp. 8-35.
- 岡真理 「『同じ女』であるとは何を意味するのか—フェミニズムの脱情地区に向けて」 『性・暴力・ネーション』 江原由美子編 勁草書房、1998年: pp. 207-56.
- 岡真理 『彼女の正しい「名前」とは何か—第三世界フェミニズムの思想』 青土社、2000年
- 及位満枝 「女性性器切除の廃絶に向けて」 アフリカ協会『月刊アフリカ』 42号、2002年: pp. 4-7.
- 大池真知子 「セクシュアリティのグローバルな構築へむけて—ジェンダー学関連の授業で語る女性性器切除」 『広島大学総合科学部『人間文化研究』 13号、2004年: pp. 47-48.
- サーダウィ、ナワル・エル (村上真弓訳) 『イヴの隠れた顔』 未来社、1988年
- 千田友紀 「フェミニズムと植民地主義—岡真理による女性性器切除批判を手がかりとして」 『大航海』 43号、2002年: pp. 128-145.
- 田浪亜央江 「彼女たちの生の全体性と私たちの問題」 インパクト出版会『インパクション』 98号、1996年: pp. 161-164.
- 内海夏子 『ドキュメント 女子割礼』 集英社新書、2003年
- 若杉なおみ 「アフリカ社会に深く埋め込まれた慣習 FGM: 女性性器切除—健康とジェンダー・セクシュアリティの視点から」 アジア経済研究所『アフリカ・レポート』 37号、2003年: pp. 21-27.
- Walker, Alice. *Possessing the Secret of Joy*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1992.
- Walker, Alice & Pratibha Parmar, *Warrior Marks: Femal Genital Mutilation and the Sexual Blinding of Women*. London: Jonathan Cape, 1993.
- アリス・ウォーカー 「アリス・ウォーカー、インタビュー」 『コスモポリタン』 1995年
- Walley, Christine, J. "Searching for Voices: Feminism, Anthropology, and the Global Debate over Female Genital Operations" in *Cultural Anthropology*, vol. 12, no. 3, 1997: pp. 405-438.
- WHO. Female Genital Mutilation: *A Joint WHO/UNFPA/UNICEF Statement*. Geneva: WHO, 1997.

